

人権なら

2016年10月1日

第70号

NPO なら人権情報センター

●ひと・まち・生き生き

依存症・子どもの貧困テーマに

第8回県「差別と人権」研究集会で論議

第8回奈良県「差別と人権」研究集会が9月3日、田原本青垣生涯学習センターで開かれた＝写真。県内外から多くの人が参加。現代社会が抱える依存症問題や子どもの貧困について議論し合った。



植村照子・実行委員長が主催者あいさつ。中幸司・県くらし創造部部長、森章浩・磯城郡町長会会長(田原本町長)の2人が来ひんあいさつした。

香川明英・事務局長が基調提案。今日の政治の流れは人権を否定する社会の動きにつながっている。人権が尊重されるやさしさとぬくもりある社会の実現に向けた取り組みの前進へ活発な論議を呼びかけた。

矢澤祐史さんが講演「依存症は回復できる」

記念講演は、矢澤祐史・(社)GARDEN理事長が「依存症は回復できる。奈良から全国へ発信11年」の演題で話をした＝写真。

矢澤さんは父親のアルコール依存や自らの薬物依存の体験を通して、依存症からの回復支援に関わっている。2005年に回復支援施設を立ち上げ。現在、奈良のほか、全国7か所12施設で120人の利用者と、スタッフ60人を抱える。



矢澤さんは、薬物依存は自分の力では止められないと知った。精神病院に入院。医師から回復者が集う

ところに行くように勧められる。沖縄の回復施設に13か月間、入所。3か月後には、「自分なんていない方がいい」という気持ちが無くなった。

その後、依存症回復先進国アメリカでラリーに出会い、自身の価値を取り戻す。今は自身の依存症を恥ではなく、ギフトだと考える。「ありのままの自分を否定せず、認めることだ」「アルコールや薬につながるのではなく、人々とながることが大切だ」と熱弁した。

地域でのつながりや支援のあり方を考える

午後は2つの分散会。第1分散会「地域共同体と共生」では、「子どもの貧困にこだわり、地域の社会資源と結びつけて支援のあり方を探ろう」がテーマ。県スクールソーシャルワーカーの谷緑さんがコーディネーターを務め、NPO法人CASNの谷口久美子さん、こども食堂いかるがの小田美津子さんと平川理恵さん、小学校教員の太塚博守さんのパネラー4人が問題提起。貧困を前面に出さずに取り組む難しさ、子どもたちやその親たちとのコミュニケーションのあり方などについて意見交換した。



第2分散会「サポートと共生」(写真)では、「依存症は正しく治療すれば回復できる。身近な人の理解と支援が！」がテーマ。八木・植松クリニックの大本淳さんがコーディネーターを務め、県断酒連合会の新井和彦・会長が「アルコール健康障害対策推進基本計画」、ワンネスグループの三宅隆之・副代表が「県内自助組織による依存症回復支援」について提起。体験者4人が自らの心の葛藤や挫折経験を語り、意見交換した。

分散会のあと、全体会を再開。まとめを行った。

神武天皇陵と洞部落

河合町人権学習講座全4回が始まる

河合町「人権学習講座」が9月9日から、始まった。講座はNPOなら人権情報センター河合支局が町の事業委託を受け、企画。今年度も4回、実施する。

町生涯学習課の杵本佳津さんが「人権問題の解決に向け学習を深めていただきたい」とあいさつ。

吉田栄治郎さん(天理大学講師)が「神武天皇



陵と被差別部落・洞(ほら)」をテーマに話をした。「かつて同和教育・部落解放運動では、洞部落が神武天皇陵を見下ろす場所にあることは天皇への不敬になるとして、強制移転させられた」と位置付けられていた。「反天皇制」教育や闘争のシンボルともなった。

だが、現在では、「政治的思惑」が先行した主張で、真実は別にあったことが明らかだ。その研究文献として、辻本正教著『「天皇(制)」による洞部落移転の実相』『洞部落移転－天皇制と部落差別』や、自著『洞村移転考序論』『洞強制移転－「天皇制権力による部落の強制移転論は成立するのか』を紹介した。

初代天皇とされる神武天皇は実存しなかった

「古事記・日本書紀」によれば、神武天皇は初代天皇とされるが、戦後の歴史学研究では実存が否定されている。672年に起きた壬申の乱の際、大海人皇子(おおあまのみこ)側が戦勝を祈願して畝傍山周辺の神武天皇陵に参拝したとされるが、その場所は不明のまま。江戸時代末期の文久3年(1863)の修復事業によって現在の場所に定まったが、綏靖(すいぜい)天皇陵というのが研究者の理解になっている。

現在のような荘厳な姿は150年の間に敷地を広げ、植林を続けた。明治23年(1890)に造営が始まった橿原神宮外苑と一体化した。昭和15年(1940)の

「紀元2600年記念事業」による整備事業で、現在の外観になった、と説明した。

この整備事業で問題になったのが「神域内」にある神社や寺、民家や墓の存在だった。畝傍・久米・四条・大久保(本村)、洞の民家や寺、墓があったが、明治中期から、徐々に移転が進んだ。

洞部落は畝傍山東北山麓にあった。狭くて陽当たりが悪く、全村移転が持ち上がる。だが、移転候補先(山本・四条など)に断られた。国主導の移転計画を受け、高市郡役所・県の働きかけで今の場所(大字四条と大字大久保)に決まった。移転によって、洞部落の生活環境は大きく好転したことは確かだ、と話した。

最後に、10月14日のフィールドワークで訪れる今井町についても紹介した。

子どもたちへの声掛けが大切

第2回三宅町「人権学習推進講座」が9月13日にあった。元三宅小学校教諭・元畿央大学講師の廣瀬よし子さんが「子育てと教育」をテーマに話をした。

「地域の人とともに、ナナメの関係と対話」が大切だとして、夏休みにあった「近所の氏神さんの賽銭箱が壊された」出来事を紹介。ある日、中学生くらいの子が境内をうろろうしていたので、「偉いな。お



参りしたんか」と声掛けした。その後、賽銭箱は壊されることが無くなった。地域の人たちが日常的に子どもたちへの「声掛け」などをすることが大切、と述べた。

続いて、「憲法と教育基本法」の歴史と位置・意味を説明。学校という場だけでは「子どもの育ち」は難しく、地域での大人の役割・関わりの大切さを指摘した。

最後に、参加者に紙を配り、「折り紙の飛行機」をつくり、「飛ばしっこ」を楽しんだ。歌「365日紙飛行機」(作詞・秋元康)にある「その距離を競うより・どう飛んだか・どこを飛んだのか・それが一番大切なんだ」を紹介。全員で子どもを思い出して、歌った。

ピープルファーストが大会

ひまわりの家から39人が横浜大会に参加

ピープルファースト横浜大会が9月21、22両日にあった。全国から1000人を超える人たちが集まった。ひまわりの家からも当事者・支援者39人が参加した。

大会実行委員会は10ヵ月、話し合いを重ねてきた。

〈差別虐待をなくそう〉〈韓国訪問の報告〉〈被災地の今〉のテーマで開催することになった。だが、突然、



7月26日に事件が起こった。相模原の津久井やまゆり園で、「障害者は生きていても意味がない」と重度の仲間たちが次々と殺された。19人の命が奪われ、27人が重軽傷を負った。重軽傷者たちは、傷は治っても、心の傷は癒えることがない。

全体会では、①事件について考える②現地ルポタージュ。シンポジウムでは、〈報道はなぜ匿名で行われたのか〉〈入所施設の立地から見えること〉〈優生思想〉について話し合った。

「障害があっても一人の人間だ」「障害があっても生まれてきて良かったと思える社会をつくらないといけない」「もっと当事者の声を聞いてほしい」「もっと地域で暮らせるようにしてほしい」との声が上がった。

「私たちの声をもっと社会に届けよう」

ピープルファーストジャパンの中山千秋・会長は「こんな大きな事件が起きても、障害のある私たちの意見を聞かれることはありません。私たちの声をもっと社会に届けなければなりません。私たち一人ひとりのことも知ってもらいたい。『障害者はなくしてしまえ』という優生思想と闘うために、同じ気持ちの当事者グループ、市民の運動と協力して、この秋、全国各地で集会をしよう」と、行動提案した。

翌日の分科会は、「戦争反対！ 平和と福祉をまも

っていこう」「グループホーム」「自分の歴史を話そう」「大藤園虐待事件」「だー!! のコーナー」など。

全体会で韓国の報告(元従軍慰安婦さんとお目にかかったこと)が

できなかったので、戦争反対の分科会で、阪本里恵さん



は「自分が好きな相手とは違う男の人たちに無理矢理相手をさせられてきた。いつ自分たちの身に起こってもおかしくないことなので、戦争はいやです。人を不幸にする戦争はいやです。これからも二度と戦争は起こしてはいけません。それをいろんなところで皆さんにお伝えしていこうと思います」と発言した。

横浜屠場を見学し職人技に感嘆

大会後の23日は、横浜市中心卸売市場食肉市場を見学した。前日22日の晩には、ひまわりのソーセイジチームは屠場労組の人たちと、「横浜中華街」で交流会をもった。

食肉市場では、着替えをして、と畜解体の現場に入った。初めて見る光景に、目をまん丸にしたり、「すごい仕事やな」「いっぱいの人が仕事をしてお肉になるんやな」「大変やな。力いっぱいいるなあ」と話していた。チームワークがないとできない仕事だと思った。

発作のあるTくんは「あんなすごい仕事はなかなか出来へん」。病院の厨房で働いているKくんは「道具は毎日、どうしてるのですか」と質問。「毎日、自分で研いでいるんですよ」と教えてもらった。Yさんは手を横に動かしながら、「あの一、こうやってやるの、むずかしいで。なかなか出来へんで。あんな風には」と職人技に感嘆していた。

屠場労組の人たちもピープルファースト大会に参加し、やまゆり園の事件などについても意見を交わした。今後も交流も続けていきたいと思う。雨続きの3日間だったが、たくさんの方々と交流でき、楽しい思い出となった。

(ひまわりの家 支援者・吉田裕子)

子どもたちに生き合う話を

山下力さんが藤田敬一さんの「山小舎」訪問

山下力さんが9月中旬、岐阜県にある藤田敬一さんの「山小舎」を訪れ、旧交を温めた＝写真。西原学も同行した。午後3時頃に到着。早速、ビールで乾杯。2人の出会いは74、5年の狭山中央闘争本部会議だという。藤田さんは山下さんより2歳年上で今年77歳。

話題はさまざまに及び、酒とともに話が尽きなかった。

「部落が消えていっている」「部落解放同盟が依拠してきた足元の共同体が…」と藤田さん。経済的に自立できる層が出ていく。山下さんは「上但馬の場合、住宅要求闘争を通じて入居した人たちは、ほとんどが外からの人たち」で、最初から、部落出身という括りはなかった、と。藤田さんは「部落民とは、部落差別とは何か、という大切な問いと答えがある」と返す。



藤田さんは、ここ数年、小さい子どもたちや、小中学生たちに「いのち、生き合う」をテーマに話をしている。「人は間違い、失敗から学んで立ち上がる」「命は

編集後記 ☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

今回の「差別と人権」研究集会で多用されたことばは「つながり」だった。依存症からの回復も「人々とのつながりが大切だ」とされた。子どもの貧困についても経済的な問題だけでなく、つながりの貧困、心の貧困が問題だ、と指摘された。多くの人々は周りの人たちのことに無関心だ。関わりたくない、と考えている。社会が分断され、諸個人はアトム化し、孤立している。地域、職場、学校、家庭などで人と人とのつながりが希薄化しているのだ。こうした状況は数十年前から、広がってきている。状況は深刻だ。にもかかわらず、危機感が乏しい。人は一人では生きていけないのだ。

一杯あって、人はその命をいただいて、命をつなげている」「人は生き合っているからこそ、生きる力をもらっている」。山下さんにも自身の経験を通して、そういうことを子どもたちに話してほしい、と勧めた。

大正エイサー祭りに参加

三宅町「学童保育クラブ」(ひまわり)のリーダー(5・6年生6人)と

スタッフが9月11日、「大正エイサー祭り」に参加した。これまで「児童館活動」として、いろんな人たちと出会い、学んできた。その1つが「大正沖縄子ども会」とのつながりだ。



「関西沖縄青少年の集い ガジュマルの会」は1975年に発足し、「エイサー」を始め、今年で42回目＝写真。

「大正沖縄子ども会エイサー団」は、エイサーを通じて沖縄の歴史や文化を学び、親子が生き生きすること



を目標に活動を続ける。大太鼓や三線(地謡)に合わせ、締め太鼓・パーラック(片面太鼓)を持ち、子ども、青年、大人が一糸乱れず踊る姿は、勇壮で力強い。

会場には屋台も出て、沖縄そばやおでん、カサームチー(月桃の葉で包んだ黒糖の餅)などを食べた。垣花義盛さん、金城宗和さんから話を聞いた。子どもたちは「うまかった。楽しかった」と感想を述べていた。

ニュースレター「人権なら」

発行:NPO法人なら人権情報センター
〒636-0223
奈良県磯城郡田原本町鍵301-1
TEL:0744-33-8585/FAX:0744-32-8833
E-mail:info@nponara.or.jp
http://www.nponara.or.jp/